みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

SER no.080; まえがき

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008666

まえがき

その1：抗争場（contested spaces）としてのストリート

2008年3月の東京発シンガポール行きの便にはインド人（タミル人など南インド系の数が多い）が目についた。これは7年前くらいまでは見られなかった光景である。東京の葛西を中心にIT技術者などのインド人が増えている現象に応じた変化であろう。さらに，そのほとんどがタミル人の乗客になるシンガポール発チェンナイ行きの飛行機に乗り換えても，皆身なりも持ち物も立派になっているし，いわゆる「国際標準」的な行動になじんでいた。というのは，15年～20年前までのシンガポールからの機内はサンダル履きの一群の若者たちがビニール袋にマドラスのバザールで売りさばく雑貨・衣類を大量に手荷物で持ち込み，座席に座るやいなや女性アテンダント（スチュワーデス）に「姉ちゃん，……を持ってきてくれ」とブランデーやウイスキーを要求し始める。何回も何回も要求する。そのうちシンガポール人の女性アテンダントが切れて（インド人アテンダントは無視を決め込む），「きちんとしゃべらない方にはサービス出来ません！」とヒステリックに叫ぶ。なんと空瓶にブランデーを貯めているのである。シートベルトサインが消えるとすぐに立ち上がり友人のところで立ち話を始める。4時間あまりの飛行の間，人は行ったり来たり機内は騒然としている。こうした光景をはじめて目の当たりにしたときには驚いたが，しかし，それももう思い出話で，そういう姿は今日見られなくなった。グローバリゼーションの疑いのない進展である。機内から，インドの路地裏のようなストリート性は消えた。

マドラスが公式にチェンナイに変わったのは1996年。すでに12年が過ぎた。タミル化の一表現であるこの都市名の改名をはさんで，そこでの都市調査を私が意識的に始めてから15年近くがたった。そして，年数を重ねる毎に，身体をはって見つめ続けた分だけ，この都市のさまざまな相貌が私の中に堆積して，その輪郭をはっきり現してきている。この間に，大通りの立体交差工事が次々と行われてあちこちで歩道が削られ歩道（路上）生活者は生活の場を追われた，しかしこの数年で不十分だが再度歩道が作られるという変化を確認できる。どうにか取って付けたような新しい歩道には大木のゆったりとした木陰はないので照り返しが厳しくてゆっくりいられない。この都市改造と平行して都市美化の施策もそれなりに進展し，少なくとも表通りは以前よりわずかにせよ綺麗になった。特にこの5年は，インド経済の急成長で超近代的なブルーのガラス張りのオフィスビル（このファサードの流行は，スウェーデンのガラス工場がチェンナイ市にあるので，見栄えがよい上に安価なのだそうだ）や高級アパートメント（都心では今や100平米ほどのアパートメントは約3,000万円／日本社会に置き換えると3億円に近い），さらにシンガポール的な綺麗さを持ったショピング・モールも増えてきている。こうし

て，大通りの風景はこの 10 年で特に大きく変わったし，都心の不動産はバブル経済のように急激に上昇している（私の友人のアパートメントはチェンナイ市の都心と郊外の間にある住宅地にあるが，前に張り出したリノベーションの効果もあるがこの 20 年で価値は 20 倍になったという，特にこの 5 年間の上昇が激しい）。このような急激な変化にもその都度その都度なんとか迅速に対応して歩道生活者はたくましく生き延びている。そういう変化の動向を経年的に見てきたので，この都市の都市改造がどのように進むのか，それに対して歩道占拠者はどう対処するのか，私はある程度予測できるようになってきた（とはいえ，チェンナイ市の南のアダヤール地区にはシリコンバレーのような IT 回廊（コリドー）の建設が進んでいるなど，この都市の激変は理解も超えようとしている）。

一例。大通りから追い出された野菜揚げの屋台は，大通りから中くらいのストリートを数 10 メートル入った歩道に移って，商売を続ける。おいしいので私もときどき買い喰いする人気のこの屋台は，もうそこで 5 年くらい家族ぐるみで頑張っている。これもいまや不法な歩道占拠を拡張して，屋台というより小店のようになっている。都心としては安くてうまいので夕方など仕事帰りの小腹の減った人たちで人だかりになるほどである。そういうときは 1 個 3 ルピー（2008 年）の揚げ物（グリーンチリー，バナナ，食パン，バダイなど）やスンダル豆が本当に飛ぶように売れる（持ち帰りも多い）。

とにかく，昨今の社会の激しい動きは，こうした歩道活動者を安定・安心からますます遠ざけているが，こんな具合に空間占拠を懸命にやりくりし続けている。食にせよ信仰にせよ，人々の評判とニーズを引き出し，それを後ろ盾にして，公共空間の私的占有という，絵に描いたような空間の抗争（contestation of spaces）が実践されているのだ。

こうした観察の蓄積のお陰で，この都市の動向のツボのようなものが私には感覚的にわかるようになってきた。だから，私には幾多の歩き回った大小のストリートが，都市の骨格としてまた血流として機能し，確かに脈打っていることが感じられるのだ。さまざまな人たちのさまざまなストリートライフが存在し擦れ合い折り重なって，まさに多様体の蠢きのようなひっかかりの多い都市景観が作り出されている。インドの都市は活気という言葉が追いつかないほどに，当初は混沌にも見える坩堝のような熱気（ときには殺気）がある。今のところ，これだけグローバル化の風が吹いても，整頓される都市空間が出来るのはまだ先だろうという状況で，階級格差がますます拡大しながらもそれが絡み合いもつれ合うインドの都市模様は，どこか空間の均質化を吹き飛ばす「人間的な」底力を感じて，頼もしくさえある。

都市を歩き回ると言っても，歩道がブロックされている場合がほとんどなので，車道の端を歩く。どこから，自動車，バス，オートリキシャ，バイク，自転車が突っ込んで来るかわからないから，振り返り振り返り，始終周りを気にしながら歩く。「ものもらい」にも追いかけられる。道ばたにはときに人が寝ている（右肩を下にした横向きの寝

方が見たところ多い，犬もよく歩道に寝ているが人と同じ寝方をしている）ので踏まないように歩かねばならない。30 分歩いたら汗が噴き出す。埃にもまみれる。騒音がすごいし，道の端はいろいろな臭いがする。しばしばおしっこの饐えた臭いが鼻をつく。そして暑い。こうした五感に突き刺してくるストリートの歩行は，歩き続けて慣れてくると自分の生理感覚に変容が起こってきて，身がほどかれるような不思議な快感を覚える。私のマドラス大学の友人は，「我々インド人は騒音なしには生きていけない」と冗談まじりに本当のことを言う。事実，彼自身，自宅のベットルームを騒音の大きい大通りに面する方にとって，外（通りから見えてくる世の中の流れ）を眺めながら快適に暮らしている。そのような姿は，いつからか「騒音」を悪として追放するべきものにしている自分のバイアスに気づかせる機会にもなる。静かなホームと喧噪のストリートとの二分法というホーム・イデオロギーにすっかり取り込まれた私が見えてくる。ストリートから撤退している私である。だから意識的にストリートを目指さないと，狭隘になってしまった自分の殻が破れない。

さすがに大都市チェンナイをすべて歩き倒すことは不可能なので，しばしばオートリキシャに乗る。私にはすでに少なからぬオートリキシャ・ドライバーの知り合いがいる。彼らは本当に貧しい。オートリキシャを自己所有している者もたまにいるが，ほとんどはその所有者から低賃金の歩合で搾取されている。メーターがついているが，使用されることは少ない。乗るたびに値段交渉である。元気なうちはいいが，疲れてくるとこれが苦痛になってくることもある。日本人の私が，ふっかけてくる値段を激しく食い下がって値切ると不機嫌になって「日本人は金持ちのくせに，ケチなやつだ」といった顔をされてお別れになる。最近は疲れるのでよく妥協する。争っているのが，10 ルピー 20 ルピーの世界だから，日本円に換算レートで直すと 30 円から 60 円で争っているわけで，馬鹿馬鹿しくもなるが，なぜか現地にいると金銭感覚もそちらに近づいてそのときはそう思えない。依然大きな物価の違いがあるから現地の人の感覚を日本での感覚に翻訳すると 500 円前後の値引き交渉に相当するのだろうが。その時その場では言いなりに出すのは本人のためにならないのではないか，などと妙な倫理観まで働くから変である。こういう私の行動は理不尽であると知ってもいる。実はどうして良いかよくわからない。

私と彼らの間には大きな経済力の落差がある（といっても，この 10 年のインド経済の急速の経済成長で物価も急上昇しているから，その落差も想像可能な範囲内にはいってきたからおちおち浪費はできない。すでに科研費での都市調査は経済的にぎりぎりなってきている）。だから，私は値切らなくてもいいはずだ。「ものもらい」に小銭をあげてもいいはずだ。合理的にはその通りだし，そうすれば一人でも二人でもその晩のおかずの足しになるだろうと思う。しかし，そこになにかひっかかりがあって，そう素直にできない。私の友人だった，メキシコを専門にしていた実直な経済地理学者は，死ぬ

間際の調査行で100万円を持って貧しい人々にばらまくようにあげた。その気持ちは痛いほどわかる。その意味でストリートの調査は心が痛く辛くなることも多い。喧噪のストリートから宿（そこもうるさいが）に戻って，自分の心がひどくショックを受けていることに気づくことがよくある。自分のしていることのつじつまが合わない。最近の私は値切りに熱心ではない。しかし素直に言い値にしないのは，何か私とドライバーとのその場その時に顔の見える人間同士としての対等さを崩したくないという直感的反応みたいなものがないとは言えない。サリーの店で，ジュエリーショップで値切ることの延長の感覚がそこに持ち込まれている。一人前の相手との交渉感覚である。でも彼らが圧倒的に社会的に不利な立場で貧困なのは明らかだから，だから，そういうきれい事の説明では矛盾は解けない。言い値で乗れば良いではないか。そう思うことも増えてきている。相変わらず答えがうまく見つからない。

こういう風に矛盾を抱えながら擦れ合いながらも，私がストリートで一番言葉を交わすのがこのドライバーたちである。スラムに住んでいる人も多い。結婚して子供が2, 3人いることが多く，金ではなく家族の話をすると顔が和む。下手ながらタミル語を話し，タミル文化が好きだと言うと驚くほど素直に喜んでくれる。ヒンドゥーが多いが，ムスリムもクリスチャンもいる。けんか別れのときもあるが，親しい友達のように別れることも少なくない。とにかく，そういうわけで彼らは私のストリートの友である。運転中もよく話す。ときに後ろ向きで私に答えるドライバーがいるので，危ないから「前を向いて運転して（しろ！）」と頼む。顔つきの悪いのや，若すぎるドライバーのオートリキシャはなるべく避ける。都市の中を移動するのに，このような均質に行かないいちいちのやりとりが伴い，沈黙ではいられないのは，やはり「顔がある」というか「人間的」と言うべきなのだろう。

ストリートはcontested spacesとして，主流社会と主流社会の抑圧する縁辺とが併存して組み合っていると，本書では説くことになる。私の都市ストリート調査はこの縁辺をたどりながら行われる。オートリキシャ・ドライバーは彼ら自身縁辺を縫って生きている者たちである。私は，彼らとのつじつまの合わない関係に呻吟しながら，しかし彼らを同伴者として，ともかく調査を続行している。

もう一点だけ記しておきたい。インド人の逞しさが，ネオリベラリズムの時代に入って，顕著になってきているように感じられる。これも冗談では必ずしもない，彼らの言い分にこういうものがある。「我々は免疫力が強い。弱いやつはもう死んでしまったからね。」と。これも結構リアリティがある。というのも，一方で，世にも冷徹な血も凍るビジネス魂をインド人は持つ。事実世界各地での経済のトップにインド人ビジネスマンが君臨している。巨大製鉄会社として急成長するロッテルダムに本社を置く鉄鋼コングマリットのミッタル・スティールはいまや世界中の製鉄会社を合併吸収せんとする勢いだ。そのトップのラクシュミ・ミッタル氏はロンドンとインドに住まいを有し，世界

第三位の資産家に最近ランクされたインド人である。その一方で，インド人の場合，血のつながりや顔の見える人間関係のネットワークに気を使い，重視する姿は，ビジネスへの利用目的もあるだろうが，それだけでは説明できない過剰性があって，人は人との関係の中で生きるものという感覚を失わない様子が見える。このインド人の中にあるインヒューマンとヒューマンとの振れ幅の大きさは，超法規的である場合も多く，問題も引き起こすが，とにかくすごいのである。中国人もこの点似ているところがある。印僑，華僑の長い経験のなせる技なのだろうが，人類学的には地縁・血縁のしなやかな強固さがこのグローバル化時代に大いに生かされているように思われる。これに比べると，日本人の振れ幅は小さいと言うより，どちらかに偏ってしまう傾向があるのではないか。生真面目と言えば生真面目だが，孤立化しやすい社会構造，内弁慶的な文化的体質などもからまって，これからの何が起こるかわからないネオリベラリズムの無情の世界をたくましく生き抜いて行けるのか心許ない。折角，たまたま私がインドをフィールドにしているので，蛇足であり，印象論に近いのだが，海外のインド系移民社会を調べている経験も併せてこのような感想を述べておくのも，波瀾万丈のストリート現象を扱う本書であるから許されるだろうと考えて記してみた。ストリートの中心でも縁辺でも逞しく生きられる人間が求められているからである。

その 2：ストリート・シンドロームの危機と創造

「ストリートの人類学」という課題設定の発想，命名の由来は，序論において述べる。研究課題の設定は理詰めで決まるだけではない。どこか直感的なものを含んでいる。アブダクションの萌芽である。出てきた言葉に誘われて思考が回転することがままあるが，「ストリートの人類学」にはそういう魅力があると，実感した 3 年半の研究会活動であった。そのことは，もし，「路上の人類学」だったら，「道の人類学」だったら，どうだろうかと考えたときに，分かる相違である。そう考えてみて，改めて思う。今私たちには，やはり，「ストリートの人類学」がまとう広々とした多彩なアレゴリーが必要なのだ。その道標となった言葉の効果は，ここに提示された報告書の多面体のプリズムのごとき内容がまさに示している。

多面体のプリズムといっても，ただ分光し乱反射しているものではない。そこは明確に貫かれた特徴がある。それは，ストリートが指し示す場は，先述の「まえがき・その 1」で示したように，contested spaces であるということだろう。しかし，現実の現場に遭遇したときは，この概念の言葉ほどにすっきりしていないし，まずもって contested になっているかどうか，どのように contested なのかも含めて，じっと観察しなければならない。現実の場は，contestation を許さない厳しさの方向にも，あるいは逆に contestation の存在も定かでない曖昧さの方向にもぶれている。いずれにせよ，この幅のある能動と受動の絡み合う力動性が，今日ストリートを問う意義になっていることは

間違いない。本報告書で論じられていくように，誰もコントロールできないほどの世界の激流が作り出す社会の流動性，再帰性と，そこに，それ故に生成する未踏で新たな意味での「恒常性」の発現の場についてのダイナミックな探究に，これ以上の言葉は当面ないと，自負している。ストリートは現にある対象であると同時に不可視の方法的希求を表現している。「芸術批評」あるいは「目覚めた歴史」というベンヤミンの方法，すなわち事実内容と真理内容の関係を意識している。ストリートの人類学は，その意味で芸術人類学であり，批評人類学である。

多彩な共同研究者やゲストスピーカーを迎えて刺激多き研究会であったことは疑いないし，まことに充実していた。そのことに相違ないのだが，当の主宰した者の思考にストリート・シンドロームとでも言うしかない何か変調が起きていることも報告しておきたい。「ストリートの人類学」を意識的に研究対象に据えて，研究仲間と共に考え始めて，足かけ4年。ここに起こっている変調は，ストリートというテーマ探究の挫折と言うよりも，むしろその探究が，何ともとらえにくいのだが重要な思考の変節を引き起こしていることの証なのだろう。ストリートは対象化したかと思えば，幻のように姿をくらます，とらえどころのない存在なのだが，それゆえに追尾したくなる魅力を放ってもいる。その魅力によってどこに連れて行かれるかと戸惑う反面，気をつけながら進めば大事な問題の場所に至れるのは間違いないとの確信も湧いてくる。そこでは必ずや探求者自身のメタモルフォーゼが求められる。簡単なことではない。

それ故であろうか，ストリートという課題の明らかな重要性と，それについて論文を書くこととの折り合いの悪さを痛感させられてもいる。これ自体が実は考えるべきこと，ストリートの難問性と可能性を物語っているのかも知れない。使う知が違うのか，知の使いどころが違うのか，不随筋を動かす闘いのようなもどかしい感触がある。要は，相も変わらずどこかでツリー状の思考の欲求を捨てられないでいることが，折り合いの悪さを作っているのではないかというのが自己診断である。しかしながら，その折り合いの悪さを意識化しつつ書くことこそが，ストリートの人類学的研究の進展の効果なのだと信じたい。これは一種の近代的思考の脳梗塞の意識的誘発という危うい試みでもある。そこに，ツリー状に形成されていた脳―身体の伝達系統が損傷を受けた状態が想定される。そこでは，脳―身体は新たなバイパス神経系を暗中模索しているのだろうと考えられる。それは，リハビリの努力に対応する。近代医療の思想とリハビリの思想はその相反する差異を明瞭化すべきであるし，し始めていると，最近のテレビ番組で改めて教えられた（NHK 総合テレビのドキュメンタリー番組『NHK スペシャル』の2月10日（日）と11日（月）の2回にわたる番組「闘うリハビリ」で，リハビリテーション医療の現状と最前線が紹介された。その第1回「あなたはここまで再生できる――脳がもつ可能性」（10日午後9時～10時14分）において，大阪の森ノ宮病院のリハビリ専門医師の宮井一郎先生が，脳内の反応を見ながらリハビリ計画を立てるという革新的な取

り組みをしていることが紹介された。とはいえ，このようなやり方がなかなか普及しないことに，神経内科，脳外科，リハビリのそれぞれの現場が一筋縄ではいかない問題を抱えていることを見て取れるのだが)。それによると，脳の能力は凄いものがあって，梗塞を起こした箇所を迂回して脳と手足の神経をつなぎ直すそうで，リハビリとそのつなぎ直しが関係していることが測定可能になった。つまり，命令されるものが命令するものを訓練によって薄皮をはぐように育てるのがリハビリである。逆転のフィードバックの発想がそこにあり，事実人間の身体と脳はその訓練に反応し命令系統を再構築するというから素晴らしい。

ツリー思考の脳梗塞，これはホームにまどろんでいた者が突然ストリートに投げ出された状態というアレゴリーを夢想させる。モダニストがもっとも廃棄してきた世界に身を投げ出される。そこで私はどう動き回りどう思考し，どう前向きに生を再構築できるだろうか。いわば，「ストリートの人類学」の3年半のプロジェクト活動が，自らの思考にストリート状況を生み出さんという効果をもたらしたようだ。それは，面白くも重要なことであるが，一種の窮状でもある。この対応の易しくない窮状こそが，リハビリの思想への痛みを伴う転換の契機であるにちがいないのだと受けとめている。

この困難な道行きに辛抱強く付き合ってくれている共同研究者も，同じような苦労と戸惑いを持っているに相違ないのだが，それだけではなく，ストリートというテーマを探究する過程でその奥行きと魅力を少しでも味わってもらえたとしたら，望外の喜びである。そうであるから，このプロジェクトにお付き合いくださり，寄稿してくれた共同研究会のメンバー諸氏，関係諸氏には格別の謝意を表したいと，倍加して思う。こうした機縁，力添え無くして，思考の変容や組み換えに勇気を持って踏み出せなかっただろう。確かに，メンバー諸氏が寄稿してくれる力作が集まり始めるにしたがって，私の中での危機が兆候の色を濃くして，前向きな創造のシンドロームだと思えるようになってきている。

*

「ストリートの人類学」共同研究の研究会開催の記録（2004年度～2007年度）

研究会への参加メンバーと各回の研究会の発表については，下記の一覧の通りである。発表者の肩書きは，その当時のものを記した。現在の所属に関しては本報告書最後の執筆者一覧をご参照いただきい。なお，各研究会での各人の発表の要旨と質疑に関しては，民博の共同研究会のホームページ（下記URL）をご覧いただきたい。

http://www.minpaku.ac.jp/research/jr/04jr070.html

【2004 年度】

2004 年 10 月 16 日（土）

関根康正（日本女子大学・人間社会学部・教授）

「研究会の趣旨説明」

野村雅一（国立民族学博物館・民族学研究開発センター・教授）

「ストリート・カルチャーをめぐって」

2004 年 12 月 23 日（木）

加藤政洋（流通科学大学・商学部・助教授）

「ストリートをめぐる地理学の系譜と現在」

小田　亮（成城大学・文芸学部・教授）

「空間としてのストリート，場所としてのストリート」

2005 年 3 月 6 日（日）

玉置育子（佐賀女子短期大学・人間生活学科・専任講師）

「ストリートと化粧文化」

鈴木裕之（国士舘大学・法学部・教授）

「ショウ・ビジネスに侵入するストリート文化――アビジャン・レゲエはいかにして誕生したか」

【2005 年度】

2005 年 6 月 18 日（土）

小馬　徹（神奈川大学・外国語学部・教授）

「グローバル化の中の都市混合言語，シェン語――ストリート文化とケニアの国民統合」

阿部年晴（埼玉大学・教養学部・名誉教授）

「『後背地』という観点――人類史の一つの見方」

2005 年 10 月 22 日（土）

ハラルド・クラインシュミット（筑波大学大学院・人文社会科学研究科・教授）

“The Street as a Changing Social Arena in Medieval Europe”

竹沢尚一郎（国立民族学博物館・民族文化研究部・教授）

「ストリート／コミュニティ／ローカリティー――博多の事例から考える」

2006 年 1 月 14 日（土）

松田素二（京都大学大学院・文学研究科・教授）

「都市暴動の世界――ストリートにおける暴力と規範」

内藤順子（九州大学大学院・人間環境学府・博士課程）
「Pasaje ――チリ・サンチャゴの貧困空間」

2006 年 2 月 17 日（金）
トム・ギル（明治学院大学・国際学部・助教授）
「ストリート文化／シェルター文化」
丸山里美（京都大学大学院・文学研究科）
「ストリートにおける抵抗の実践？――女性ホームレスの社会的世界」

2006 年 2 月 18 日（土）
森田良成（大阪大学大学院・人間科学研究科・博士課程）
「『怠け者』とストリート――東インドネシア・クパンの廃品回収人」
国弘暁子（お茶の水女子大学大学院・人間文化研究科・博士課程）
「ストリートに生きるヒジュラの実践知――インド，グジャラート州の事例から」

【2006 年度】
2006 年 6 月 24 日（土）
北島敬三（photographers' gallery・写真家）
「ストリート写真」
棚橋　訓（お茶の水女子大学大学院・人間科学系・教授）
「島世界と〈ストリートの人類学〉――ポリネシアの場合」

2006 年 6 月 25 日（日）
近森高明（日本女子大学・人間社会学部・専任講師）
「遊歩者論・再考」
関根康正（日本女子大学・人間社会学部・教授）
「〈ストリートの人類学〉という構想」

2006 年 10 月 28 日（土）
妹尾達彦（中央大学・文学部・教授）
「北京の小さな橋――街角のグローバル・ヒストリー」
島村一平（滋賀県立大学・人間文化学部・専任講師）
「ハイカルチャー化するサブカルチャー？とストリート文化――モンゴルのロック・ヒップホップの事例から」

2006 年 12 月 23 日（土）
池谷和信（国立民族学博物館・民族社会研究部・教授）
「ストリートチルドレンと映像人類学」

上杉富之（成城大学・文芸学部・教授）
「脱アイデンティティ？――トランスナショナリズムとクイア理論の共時性をめぐって」
朝日由実子（上智大学大学院・外国語学研究科・博士課程）
「布の生産・消費から見るストリート――カンボジアにおける絹織物生産村落の事例より」

2007 年 2 月 23 日（金）
南　博文（九州大学大学院・人間環境学研究院・教授）
「ストリートからみる都市の無意識」
山田香織（国立民族学博物館・外来研究員）
「秩序（Ordnung）の下にあるストリート――ドイツ・ミュンヘンの事例」

【2007 年度】
2007 年 6 月 30 日（土）
西垣　有（大阪大学大学院・日本学術振興会特別研究員 DC）
「モンゴル・ウランバートル市におけるトランスナショナルな場の生成」
田沼幸子（大阪大学・特別招聘研究員）
「あの人たちには文化がない――革命キューバのストリート（calle）」

2007 年 7 月 1 日（日）
成果報告へ向けての総合討論
1）野村雅一「『民博通信』116 号（特集：ストリートの人類学）へのコメント」
2）全メンバー「執筆予定成果論文のタイトルと概要」
3）全体討論

2007 年 11 月 10 日（土）
松本博之（奈良女子大学・文学部・教授）
「報告書刊行に向けての総括コメント――『二つの海の道――実践と表象』」
関根康正（日本女子大学・人間社会学部・教授）
「報告書とりまとめの方向性――もくじ案の説明を中心に」
全　員「総括討論 1：前回の総括討論を引き継いで」
「総括討論 2：報告書寄稿論文をめぐって」

謝　辞

本書は民博の共同研究「ストリートの人類学」の主たる成果である。すでに研究過程でメンバー各人が関連の業績を生産しているから，それらもこの共同研究に負っているのは言うまでもない。まず，このような挑戦的なテーマの共同研究に機会を与えてくれた国立民族学博物館に対して感謝の意を表したい。きわめて大人数の研究会であった

が，その理由は若い研究者となるべく交流を持ちたかったからである。彼らによってこそ「ストリートの人類学」の主旨は今後発展的に担われるだろうからである。有意ある若い研究者が期待に応えて，貴重なフィールワークに基づく興味深い論考を寄せてくれた。また，目下，日本で現代人類学を牽引している有力な研究者が中心的なメンバーとして，多忙にもかかわらず時間を割いて参加してくれた。ここに寄稿された彼らの優れた論考の重要性は言を俟たない。じっくり味わっていただきたい。既定の構成メンバーの他に，ゲストスピーカーを迎えることができ，大きな刺激を与えてもらった。都市空間に関心を向ける心理学者南博文氏，気鋭の写真家北島敬三氏，トランスナショナリズムやクイア理論に詳しい人類学者上杉富之氏，社会主義再考にかかわるユートピア論を追究する田沼幸子氏の4氏である。しかも，南氏は本書に寄稿までしてくれた。そのご厚意に感謝したい。若い研究者の中に自発的にこの研究会に関心を寄せ，熱心に参加して寄稿までしてくれた西垣有，市川哲，磯田和秀の諸氏にも感謝する。

民博館員で共同研究に参加していただいた野村雅一氏（現在は国立民族学博物館名誉教授・総合研究大学院大学副学長）は，本研究について実質的には編者との共同主宰者である。前回の共同研究「〈都市的なるもの〉とは何か」以来強力なサポートを頂いている。野村氏の先見の明と洞察に富んだ指摘の数々はこの研究会の命運を握っていたと言っても過言ではない。また，野村氏が定年で退任された後では民博の竹沢尚一郎氏，池谷和信氏には格別の協力をしていただき，意を強くした。

共同研究の実践は，主査者が館外の人間で東京在住のために，研究会の準備や事務手続きを民博の方にお願いしなければならなかった。研究会実施時に民博の機関研究員や外来研究員をされていた島村一平，木村自，山田香織，市川哲の諸氏が格別の協力をしてくださった。彼らの献身的な協力なしに，長い3年半に渡る研究会は成立しなかった。これらの方々のご支援に深く感謝したい。

さらに，若手のメンバーの方々が，各会の研究会の要約をまとめてくださったので，それを民博のホームページ上で順次公開でき，少なからぬアクセスを得ていたと聞いている。この努力はかなりの負担を強いたが，記録が残ることで研究会の積み重ねに大きな力になったし，本報告書を作成する際にも有用であった。

最後になるが，内藤順子，朝日由実子両氏にはさまざま事務仕事をしていただき研究会活動を支えていただいた。内藤順子氏には多数の論文を掲載する本報告書をまとめるという苦労の多い編集の労をとってもらい，その多大な貢献に謝意を述べたい。

本書は研究会の報告書として独立の位置を占める成果であるが，この共同研究会に参加した同じメンバーが，関根が代表になって申請した日本学術振興会からの科学研究費補助金・基盤研究A（海外学術研究）「トランスナショナリズムと〈ストリート〉現象の人類学的研究」が幸いにも2006年度から4年間にわたって認められた。この研究が評価され採択されたことを素直にうれしく思うし，成果を期待されていることを実感し

た。民博共同研究会と科研調査は2年間重なったので，本書にその調査成果が一部すでに取り込まれていることを明記しておきたい。タイムリーな採択に改めて謝意を表する。本報告書刊行後にさらに2年間科研費による研究が継続するので，探究の手をゆるめずに続行していきたい。

この科研のHP〈http://www.transnationalstreet.jp/〉に研究経過を随時掲載していきたいと考えている。そして，科研報告書となる，近い将来の成果も，本書の続編として刊行される予定である。

（編者）

〈再録論文についてのお断りと謝辞〉

第2章は，関根康正2007「ストリートという縁辺で人類学する――『ストリートの人類学』の提唱」『民博通信』No.116（特集・ストリートの人類学　関根康正責任編集）に加筆したものである。

第26章は，関根康正2007「『資本としての知識』から『資源としての知識』への視点の移行がもたらすもの」『知識資源の陰と陽』（C.ダニエルス編）弘文堂の再録であり，弘文堂より許可をいただいた。この論文は，文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築：象徴系と生態系の連関をとおして」（代表内堀基光）の研究分担者としての成果であるので，責任研究機関であった東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所に対して記して謝意を述べたい。またこの特定領域研究の代表であった内堀基光氏にも記して感謝申し上げる。